

Y S K

りに現実離れしていく、ただただ恐ろしかったです」

I.

大食家で有名なバヤシは毎日ハニーマスターードを
朝に一本。
ブランチに〇・五本。
昼に二本。
夜に三本。

取り入れていた。

彼はハニーマスターードの買いすぎで近所のスーパーを
出禁になり、ダイナーに備え付けのマスターードも飲み干
してしまって、ダイナーも出禁になつた。そのため、妻
が各地のスーパーを練り歩きながらバヤシのエネルギー
源を確保していた。

現場に居合わせた客も語ってくれた。
「俺はそのときジョーズ・ダイナー・スペシャルのホツ
トドッグを食べてたんだ。あの店主はマスターードばつか
多めにかけやがつて物足りないんで、オレはいつも卓上
のケチャップをぶっかけまくつてるんだが、そうしてた
らいきなり頭のおかしい男がマスターードの歌を歌いなが
ら近づいてきて、『アー・ユー……マスターード・デスト
ロイヤー?』とかおかしなこと抜かしてきたから、中指
をつい立てちまつた。そうして今はこんなザマさ。まだ
退院まで時間がかかるつて医者が言つてたんだ。まつた
く迷惑な話だぜ」

ある日、バヤシが朝、顔を洗つていると、黄色い液体
が洗面台に落ちていることに気づく。
「オウ……ソウ、タイニイリル・ハニーマスター
ド……?」
マスターードマン、「」とバヤシは小さな生命の息吹をそ
の液体に感じた。

「私は恐怖しました」
ジョーズ・ダイナーの店主は涙ながらに証言した。

「彼は毎回店に入るや否や、『ハニーマスターード・エ
リディ……♪ ハニーマスターード・エーヴリディ……♪』
と口ずさんで、すべての客席のマスターードを一本ずつ、
恍惚に満ちた表情で飲み干すんですよ。その光景はあま

母性。
父性。
彼は感じる。『愛』を。

II.
バヤシは泣いていた。

妻の呆れた顔と、膨れ衰えていく自分の肉体に。

「私、バヤシさんのファンなんです」

「次の動画ではどんな過激なことしてくれるのか楽しみにしてます！」

甘いデジタルの言葉に満たされるバヤシの欲求が、妻との冷え切つた関係を癒してくれた。あの冷たいベッドでの、冷やかな沈黙と、視界の端に映る妻のくたびれた背中。それを見るたびに彼の心は傷んでいたが、一本のマスターが彼を救ってくれた。

【ハニー・マスター・チャレンジ】

その作品は彼を一人の悲しい男から、ミスター・マスターへと変えてくれた。

頬が二つある。暖かい陽の光と、彼の目に宿る優しい感情、海の心地よい風の感覚をまだ鮮明に思い出せる。今のが感じるのは、黄色い液体の染みついたリビングのすっぱい匂いだけ。

何が彼を狂わせたのか？
どこで間違えたのか？

過激な投稿を無理してでも止めさせれば良かつたのか……？

後悔は絶えない。

でも、今でも彼のことを愛しく思っている。

また元通りになれる。
そんな希望を捨てきれずにいた。

「ウワアアアアアア！」

突然下の階から恐ろしい、低く唸る叫びが聞こえてきた。まずい、マスターのストックを切らしていたのかしら。

III.
バヤシの妻は、かつて二人で使っていたベッドに一人で座っている。新婚旅行で訪れたバヤシの故郷、千葉。美しい自然と海のコントラストを背景に、仲睦まじい笑

彼女は恐る恐る部屋を出て、暗い階段を慎重に下って

いく。階段を下るにつれ、マスターのつんとした匂いが鼻を貫いた。

嫌な予感がする。
全身の鳥肌が立ち、背筋に緊張が走る。

彼女はいつもの「苦痛の部屋」へ。
——かつてそれは二人の愛を育む時間があった場所。
薄型テレビに映る大味なガンアクション映画、彼が遅くなるといつも買ってくるジョーズ・ダイナーのテイクアウト……そして甘い接吻。

その思い出もすべて消え去る。マスターの強烈な匂いと、忌々しい黄色いドアの前に立たされながら。

「失礼いたします。ミスター・ハニー・マスター・ハズバンド……」

ガチャ。

彼女はベトベトしたドアノブに手をかけ、ゆっくりと、彼を刺激しないようにドアを開ける。

彼の脚も、太ももも、お腹も、胸も、肩も、すべてマスターの忌々しい液にまみれていた。ところどころから液体がただれており、グロテスクな見た目をしている。
マスターの匂いの中にほんの少しだけ、彼の汗の匂いを感じ、やはり彼は夫なのだと確信した。

電気の消された部屋の中には、闇と、床に散らばる金色のどす黒い液体。しかし、そこには赤い水溜り……ケチャップ？ も混じっていた。

そして、彼の顔を見ると——。

おそるおそるマスターの床を歩いていく。
床に足をつけるたびに、ねちやねちやとした感覚が伝わり、気持ち悪い。転ぶことのないよう、足元を一步一歩確認しながら進んでいった。

そのまま進むと、夫の足が目に入った。しかし、その足は真っ黄色のマスターにまみれていた。

「あなた……？」

彼女はゆっくりと、現実から目を背けたい気持ちを押し殺しながら視界を上げていく。

彼の脚も、太ももも、お腹も、胸も、肩も、すべてマスターの忌々しい液にまみれていた。ところどころから液体がただれており、グロテスクな見た目をしている。
マスターの匂いの中にほんの少しだけ、彼の汗の匂いを感じ、やはり彼は夫なのだと確信した。

真つ黄色な丸い頭頂部、マスターで塞がれた目、そして口からは赤い液体が垂れている。

それでも、私の夫なのだ。愛しい私の夫。

「アム……アイ……マスター・デストロイヤー……？
テルミー、プリーズ、マイ、マスター・ワイフ……ア
イム、スケアド……」

彼の口が裂け、中からグチャグチャと音を立てて赤黒い液体が彼女の顔面に吹き出す。

彼女は叫んだ。

逃げなければ。

だが足元をすくわれ、顔面から床に叩きつけられた。

意識が落ちていく。

IV.

目が覚める。

寝起きは意外とすつきりしており、先日の出来事がおぼろげながら脳裏に残るが、不思議と気分は落ち着いていく。

彼女は赤と黄色の世界からのそのそと立ち上がり、部屋の周囲を見渡す。

彼女の背後には、虚しく横たわる黄色い人影。床には赤い液体がどす黒い水溜りを各地に作っていた。

ふと、液体の侵食がない床の一部分に小さな紙切れが置かれていることに気づく。

汚さないように、手についた液体をそそくさと舐め取つてから紙を手に取った。

ジョーズ・ダイナーの名刺だ。

裏面を見ると、そこに手書きの文章が添えられている。

「奥様、ご無沙汰しております。陰ながら貴方を見守つていきました。ジョーズ・ダイナー、ハンブルグストリート5103番地、PM 12..30に『ジョーズ・ダイナー・スペシャルのマスター・ド・オーブ・増し』を店主のジヨーに注文してください。あとは直接お話しできれば」

文章の最後には、筆記体で Mr. Ketchup とのサイン。

「Mr. Ketchup……♪」

戸惑いと困惑の中、赤黄の世界に崩れ落ちる。
紙の端には、赤い液体が滲んでいた。
甘く酸っぱい匂いが部屋に充満している。
その匂いは果たして夫のものだったのか。
それとも——。